

氏名	小林 幸恵
学位の種類	博士（生活支援学）
学位記番号	甲第6号
学位授与年月日	令和5年3月17日
学位授与の要件	西九州大学大学院学位規程 第4条の2第1項
学位論文名	慢性疾患のある独居高齢者の孤独感と セルフケア能力に関する研究
論文審査委員	主査 田中 豊治 教授 （西九州大学大学院 生活支援科学研究科） 副査 白田 久美子 教授 （西九州大学大学院 生活支援科学研究科） 副査 坂田 周一 特任教授 （西九州大学大学院 生活支援科学研究科） 副査 中島 富有子 教授 （福岡看護大学大学院 看護学研究科）

論文内容の要旨

学籍番号	19D003
氏名	小林 幸恵
論文名	慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力に関する研究 (A study of loneliness and self-care agency of elderly people living alone with chronic disease)
<p>我が国は先進諸国の中でも急速な高齢化が進み、2065年には国民の約2.6人に1人が65歳以上となる社会が到来すると推計されている。また、近年、離婚や死別、未婚などにより独居高齢者数が増加傾向にあることや、高齢者の9割近くが慢性疾患を有していることが報告されている。これらから、独居ですぐ傍に頼れる人がおらず、かつ慢性疾患のある高齢者は、疾患管理を含めたセルフケアに困難を感じるのではないかと考えた。他方、孤独感と健康は問題を生じやすい関係であることが知られており、中でも高齢者の孤独は、深刻な健康障害をもたらすことが指摘されている。独居は、孤独感をもたらす要因の一つとされるため、前述した慢性疾患のある独居高齢者のセルフケアは、孤独感に影響を受けないのだろうかという疑問を持った。これまでに、慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力の関係について報告されたものはない。これを踏まえ、本学位論文では、慢性疾患のある独居高齢者が、一人で暮らすことによって抱く孤独感とセルフケア能力が、どのように関連しているのか明らかにし、その当事者の内面世界の構造を理解した上で、地域で一人で生活する高齢者へのセルフケア維持・向上への介入方法について考察することを目的とする。</p> <p>本学位論文は6章で構成する。</p> <p>第一章では、研究の背景、研究目的と方法について述べた。すなわち、我が国は先進諸国の中でも稀にみる早さで高齢化が進んでいる現状にあること、長期の受療が必要となる高齢者の慢性疾患の罹患率が高いこと、離婚や生涯未婚率の上昇による単独世帯の増加および高齢者の孤独感と健康問題について多くの報告があることを踏まえ、本学位論文の目的と意義について述べた。</p> <p>第二章では、本学位論文の目的を達成するために、慢性疾患のある独居高齢者の孤独感が、どのようにセルフケア能力と関係するのかについて概念枠組みを作成し、更に3つの作業仮説を設定した。</p> <p>仮説1：慢性疾患のある独居高齢者の孤独感は、セルフケア能力と関連する。</p> <p>仮説2：慢性疾患のある独居高齢者の孤独感は、社会関係の再構築により軽減できる。</p>	

仮説3：慢性疾患のある独居高齢者は、支援者の存在により孤独感が軽減することでセルフケア能力が維持される。

これらの仮説の検証として、文献的考察、量的研究、質的研究に取り組んだ。

第三章では、慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力に関する文献研究を行い、孤独感およびセルフケア研究を概観した。それを基に、慢性疾患のある独居高齢者のセルフケアに関する概念分析を行い、「慢性疾患を抱えながらも自宅で暮らしたいという希望を持ち（やむを得ない場合含む）、病状の悪化や急変などの独居生活を破綻させる要因に曝されながらも緊急時の備えを行い、周囲のサポートを得ながら一人で日常生活を維持すること」と定義づけた。

第四章では、慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力について、インターネットリサーチを用いた量的研究を行い、慢性疾患のある独居高齢者の孤独感はセルフケア能力に関連していること、および関連要因が明らかになった。また、独居高齢者の方が同居高齢者よりも孤独感がセルフケア能力に影響していたことが明らかになった。また、コロナ禍において、独居高齢者では単に感染の不安があるだけではなく、外出機会の減少によって疾患管理や日常生活の維持に不都合を感じていること、他者との交流が減少し、孤独感を感じやすい状況にあることが明らかとなった。

第五章では、慢性疾患のある独居高齢者に対して半構造化面接を行い、どのような経験をしながらセルフケアを維持しているのか、また日常生活においてどのようなことが孤独感に至りうると考えられ、それとどう付き合いながら生活を過ごしているのかについて調査した。その結果、慢性疾患を抱えながら独居生活を継続するために、できる範囲での無理のない健康管理や、何かができない自分も受け入れて折り合いをつけながら日常生活を維持していた。また、孤独感はないとしつつも、孤独感に至りうる寂しさは抱いており、この両方の思いがその時々によって揺らぐことがわかった。しかし孤独感に至らずに済んでいるのは、独居とはいえ、支えてくれる家族や友人といった親しい人々との相互交流であり、これによってセルフケアが維持されているという内面世界が明らかになった。

第六章では、総合的考察として、これまでの研究結果から仮説の検証を行い、慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力の構造考察を行った。その上で、考え得る慢性疾患のある独居高齢者のセルフケア支援としての孤独感介入、および慢性疾患のある独居高齢者へのセルフケア維持に向けた対応モデルについて検討した。最後に、研究の限界として、調査に性差がみられたこと、研究参加者が結果的にセルフケアがある程度自立した者ばかりとなったこと等について、今後の課題と合わせて述べた。

本学位論文の目的は、慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力が、どのように関連しているのか、また独居高齢者の内面世界の構造を理解した上で、セルフケア維持・向上への介入方法について考察することであった。先行研究において、孤独感とセル

フケア能力の関連について述べた報告はなく、また、それらがどのような構造をしているのか考察したものもなかった。本学位論文では、慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力には関連があること、その内面世界としては、日々起こる色々な出来事に対して折り合いをつけながら、自己肯定感をもって疾患管理を含めた日常生活管理を行っていることがわかった。また、時にどうしようもない気がかりなどによって揺らぐ心を包含しており、そこから孤独感に至る可能性があること、それを抑制しているのは支えてくれる人々との交流であることが確認できた。慢性疾患のある独居高齢者がセルフケアを維持するためには、複雑な心理状態が働いていることを本人と支援者が理解し、健康増悪をきたさずに生活が継続できるように、自らの健康管理に目的指向性を持てるような働きかけが必要である。慢性疾患のある独居高齢者の孤独感に注目しながら、セルフケア能力を維持できるように、今後コミュニティへの働きかけへの可能性を探りたい。本学位論文によって、今後の孤独感を踏まえた新たなセルフケア支援の方略について、一考の余地を提供できたと考える。

博士学位論文審査結果等報告書

令和5年2月16日

生活支援科学研究科長 殿

博士学位論文審査委員会

(主 査) 田中 豊治

(副 査) 坂田 周一

(副 査) 白田 久美子 (指導教員)

(副 査) 中島 富有子 (外部委員)

学位申請者氏名	小林 幸恵
論文題名	慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力に関する研究
学位論文審査及び最終試験の結果	<input type="checkbox"/> 合格 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 不合格

論文審査結果の要旨

1 論文の意義

本学位論文の目的は、慢性疾患のある独居高齢者が、一人で暮らすことによって抱く孤独感とセルフケア能力が、どのように関連しているのか明らかにし、その当事者の内面世界の構造を理解した上で、地域で一人で生活する高齢者へのセルフケア維持・向上への介入方法について考察することである。これにより、真の意味での地域包括ケアシステムがめざす「自分らしい暮らしを最後まで続ける」ことを推進でき、尊厳ある生き抜き方の支援ができると考えられる。

2 本論文のオリジナリティ

本学論文における具体的な作業仮説として、次のように設定されている。

仮説1：慢性疾患のある独居高齢者の孤独感は、セルフケア能力と関連する。

仮説2：慢性疾患のある独居高齢者の孤独感は、社会関係の再構築により軽減できる。

仮説3：慢性疾患のある独居高齢者は、支援者の存在により孤独感が軽減することでセルフケア能力が維持される。

これら3つの仮説を検証するために、本論文では、理論的・文献的考察を行った後、慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力に関する量的研究（仮説1）、さらに慢性疾患のある独居高齢者の孤独感とセルフケア能力に関する質的研究（仮説2、仮説3）が実施されている。そしてその後、それらの結果を軸として総合的に考察し、研究目的の達成を図り、課題解決に向けたアプローチをしている。

①文献研究により、様々な先行研究を総括し、我が国における慢性疾患のある独居高齢者のセルフケアは、「慢性疾患を抱えながらも自宅で暮らしたいという希望を持ち（やむを得ない場合含む）、

病状の悪化や急変などの独居生活を破綻させうる要因に曝されながらも緊急時の備えを行い、周囲のサポートを得ながら一人で日常生活を維持すること」という定義を導出している。

②量的研究では重回帰分析などにより、独居および同居高齢者ともに孤独感とセルフケア能力には一定の関連があり、「独居高齢者の方が、孤独感が強くなるほどセルフケア能力が低くなる」という傾向が確認できた。これにより、独居高齢者のセルフケアの能力の維持に、孤独感への支援が有効であるとの示唆が得られた。

③質的研究ではインタビュー調査やグラウンデッドセオリー・アプローチなどにより、慢性疾患を抱えながら独居生活を継続するためには、できる範囲での無理のない健康管理や、何かができない自分も受け入れて折り合いをつけることが必要であるという結果が明らかになった。また、孤独感はないとしつつも、孤独感に至りうる寂しさは抱いており、この両方の思いがその時々によって揺らぐものであることを援助者は理解しておくことが大切である。独居とはいえ、この揺らぐ気持ちを支えてくれるのは家族や友人といった親しい人々との相互交流であり、これが主観的幸福感や *self-esteem* を高めてセルフケア能力の維持・向上に貢献しているものと考えられる。そのため外部との交流が維持できるような環境づくりが求められている

④さらに慢性疾患のある独居高齢者へのセルフケア維持に向けた「対応モデル」として、自治体・医療・介護・研究機関が一体となった対応モデルの働きかけにより、独居高齢者の孤独感が低減され、セルフケア能力の維持に貢献すると考えられる。

こうした論考過程により、綿密な仮説検証が行われ、論旨は一貫し整合性は保たれている。

3 論文に残された課題

本論文の現時点における限界としては、量的研究と質的研究の対象者に性差があったことである。量的調査はインターネットリサーチを用いて行った結果、回答者の7割が男性であった。また、セルフケア能力が深刻に低下している場合には、インターネットに接続して回答することは、精神上難しいと予想されるため、セルフケアが自立している集団であったという偏移は否めない。

また M-GTA で分析した質的研究では、対象者全員が女性であった。男性がいることで、語りの内容の要素にバリエーションが出た可能性があり、対象が女性のみとなったことで性差によるデータの広がりを取り込むことができなかった。

今後の課題としては、孤独感とセルフケア能力の因果関係を証明した上で、さらに実際に現場での介入研究によって新たな知見を獲得していくことであろう。それがさらに地域・行政との連携をとり、コミュニティ全体から、病を抱えて一人暮らしする高齢者の孤独・孤立に対する方略を検討していくことにつながるからである。

4 博士（生活支援学）の可否

本論文は、「慢性疾患」「独居」「高齢者」の多くの方々が直面している「孤独感」という極めて大きなテーマに焦点を当て、「なぜ孤独感に陥るのか」、その内面的世界の構造分析から考察を始め、「孤独感とセルフケア能力との相関関係性」を検討した上で、「ではどうすれば、その孤独感を抑制し低下し軽減できるのか」という難題に対して、小林氏は、「①セルフケア能力の維持・向上」が大切であり、そのための「②社会関係の再構築」と、さらに「③支援者の存在と関与」が必要不可欠であると仮説設定し、具体的に文献研究・量的研究・質的研究により、これを詳細に検証している。さらにいえば、その孤独感を軽減しセルフケア能力を維持・向上させるための支援策や介入方法にも言及し、より具体的な施策提言も行っている。

博士論文の申請要件は、学会発表2編、学術論文3編であるが、これまでに学会発表6編と論

文投稿 4 編が採用、掲載されており、要件を満たしている。

上記のように本論文は、まだ残された課題はあるものの、それは今後本人がライフワークとして取り組むべき課題である。また 2 回に及ぶ論文審査においても毎回指摘された箇所を懇切丁寧に誠実に修正してきた。

従って本論文は「博士」の学位を授与するに値するものとして評価できる。

令和 5 年 2 月 1 6 日

西九州大学大学院 生活支援科学研究科

署名 田中 豊治

